

現地に学ぶツアー



西尾市岩瀬文庫を訪ねて (第2弾)

3月25日(土)に研究所主催の現地に学ぶツアーが開催され、参加しました。そこで感じたことをはじめは徒然なるままに、終わりはどうなりますか……報告したいと思います。

理事・有本信昭

若い人たちへの想い 学ぶことを学ぶ

西尾市岩瀬文庫

西尾市岩瀬文庫については、所報384号に学芸員青木眞美氏の詳しい報告があります。地元の実業家岩瀬弥助の篤志により設立され、いくつかの変遷を得て今は市民に支えられた「日本初の古書ミュージアム」西尾市立岩瀬文庫として8万余冊の蔵書を誇っています。

当日は、青木氏にご案内いただきました。まずB1Fの研修ホールで岩瀬文庫紹介の映像を見せていただき、その後2Fの「常設展示室」を説明していただきました。「常設展示室」では、「岩瀬弥助と岩瀬文庫の年表」、「日本の本の種類」、「日本の印刷・出版の歴史」および「写本(手書きの本)」などのコーナーが設けてありました。

その後、閲覧室に入りました。所報でも紹介されているように、岩瀬文庫の最大の特徴で、蔵書(古書)を手にとってみるができます。創設時から変わらず18歳以上なら誰にでも公開されています。古書を傷めないように、閲覧室入口で時計・携帯電話やぶら下げ式の名札などをカメラ・カバンなどと一緒にロッカーに収め、手を洗ってから古書の閲覧に入ります。私たちは、「枕草子」、「本草図(圖)説」および「夏目漱石の手紙」などに触ることができました。紙の質、傷み具合や修復(ボランティアの皆さんの苦勞の賜物)の様子などを手にとってみることができ、大変貴重な体験をしました。多少の交通費だけ(岩瀬文庫は入場無料)でこれができる

のは信じられないほどの、お金に代えがたい体験でした。

「写本(手書きの本)」

「常設展示室」では、「写本(しゃほん)」について「手書きの本」と説明がありました。私は古書の専門家ではないのですが、素人考えでは「手書きの本」では説明が広すぎて(原本も手書きであるが写本ではない)、「(おそらくすべて手書きの)原本を肉筆で写した本」の方が正確ではないかと思います。「常設展示室」の「日本の印刷・出版の歴史」で示されているように印刷技術が未発達であり、ましてやコピー機やカメラがない昔、書籍が高価でも手元に置きたい場合、原本またはその写本の所有者の了解を得て肉筆で写すことが多かったと思います。これが繰り返され、貴重な書籍が広く普及したのだと思います。

なぜここで「写本」に注目したかということ、岩瀬文庫見学の最後に閲覧室で見た「本草図説」の写真印刷冊子を手に入れたく思い、1F休憩室奥の売り場で「本草図説八 鳥」を購入しました。この随想記事に掲載することはできませんが、遠くから見て多少の濃淡はあるものの単色の面に見える部分は、塗りつぶした地の上に一本一本色の濃淡の違う羽毛を線描きしているのです。その細かさにびっくりしました。これも素人考えですが「羽毛の線一本、手先が狂ったら全部書き直した」と思いました。その後、どこかで読んだ日本画の初心者のトレーニング方法を思い出しました。筆で、縦だったか横だったか、一本線を引き、まっすぐな線を色の濃淡をつけ

ずに端から端まできれいに描くのだそうです。多分曲線や色の濃淡は、その後でしょう。それを習得すると、見本の絵や図を正確に写本できるようになるまでトレーニングを続けるのだと思います。つまり、プロの絵かきは「手先が狂わない」ものだということです。そしていつか師匠を超える写実的な、もしくは独創的な絵や図を描けるようになっていくのだと思います。

私の「写本まがい」

これも「写本」に注目した理由の一つですが、青木氏の「写本」の説明を聞きながら、すぐに「写本は昔やったことがあるぞ」と思いました。経済学徒の私は、金がなく図書館や先輩から借りた経済学の古典を大学ノートに一生懸命写していました。「それが一番の勉強だ」と誰かに聞いていたからです。コピー機はどこもないし、図書館にもそのサービスはありませんでした。しかもあってもコピー代は高かったろうと思います。金がないので、瓶詰のインクをスポイトでくみ取って、出はじめたばかりのカートリッジ(これも高かった)に詰めてペン書きしていたことを覚えています。今思い出すと、それが私の文章作成技法の習得の場でした。経済学の古典はドイツ語の日本語訳が多いのですが、「なんておかしな日本語だろう。なんて難しい表現なんだろう」と思いながら、著名なフレーズや名著と言われるものをはじめは全文、のちには多少の要約をしながら筆記していたことを思い出します。

文章作成技法の向上は、専門用語の概念理解と概念の相互関係の整理およびその表現技法向上と同じことを意味しています。何度も何度も繰り返して古典を読み続け、写し続け、写し方が上手になっていくほど、頭の中が整理され、より上手にその関係を表現できるようになります(絵のトレーニングと同様)。当然そのことを他者に要領よく説明することもできるようになります。

印刷(コピーや写真)・電子情報の巨大な進歩

「写本まがい」をしなくなったのは無料で利用できるコピー機の登場によりました。4年生になった頃、学生研究室に先生から「青焼き」

(湿式)コピー機が、紙・インクとも無料で下渡されました。バンバン好きなだけコピーを取ることができるのです。しばらくして、「資料はたまったけれども、全然読んでないし、頭に入っていないな」と思いました。コピーは便利ですが、それをしっかり読み込まないことには意味がありません。そして他者と議論しながら、理解を進めていくのが一番だと思います。ひょっとしたら、私どもが最後の「写本まがい」世代だったのかもしれませんが。そしてすごく貴重な経験であったと今でも思います。それから50年近くすぎ、今ではいろんな情報はインターネットからほとんど無料でなんでも入手できますし、コピー機もプリンター兼用で(紙・インクと機械代を無視すれば)無料で利用できます。カメラもデジタル化し、紙・インクと機械代を無視すれば無尽蔵に手軽に利用できます。取っおきたい情報・資料も電子情報のままPCなどに保存することができます。大学生は、授業も電子情報の書籍を利用する今日この頃です(これは有料)。

巨大すぎる課題を目の前にして立ちすくむ

今の我々は、そしてそれに続く世代は、かつての「コピーバンバン」状態ではないでしょうか(情報はたくさん持っているかアクセスできるが、適切なものを選択できないし、それを組み合わせる有効に活用できない)。芸術分野での絵のトレーニング、その人らしいやり方での文章作成技法(批判的なものの見方・考え方の基礎としての論理的思考能力とその説得的な表現能力、他者とのコミュニケーション能力)はどこで獲得されるのでしょうか。この生きる力・知恵、コミュニケーション能力は、だれが、どこで、どのように保証してくれるのでしょうか。研究所の目的で言えば、様々な地域と地方自治の現状を見極め、「地方自治の発展と民主的自治体の建設をめざすさまざまな運動の発展に寄与する」「調査・研究・普及活動」を進めるその前提として、一人ひとりの会員・市民(大人も子供も)の皆さんの自立めざしてどう向き合っていけばよいのでしょうか。立ちすくむ思いの毎日です。以上。